

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 510 JAPAN

里見八犬傳 第五輯 卷二



五編六、七、八

二

傷寒院

杉師

南總里見八犬傳第五輯卷之二

東都曲亭主人編次

木下闇ノ妙真依介を訝る

第四十四

神宮渡小信乃猪平ノ遭ふ

あまき死ぢ、ちうすらも。ざんごべゑ、ちうも。ふぐ、あくさ、ちくそ。りととろき
蟻崎十郎、照文ハ文五兵衛共、仇ニ逃る、惡黨を追走し、舊の外、事アリ。
妙真ハ小草の上、伏沈する。俊彦を頻々呼ぶ。応セば、夷つて、と警候。兩人
右より左より、やがて扶起し、遼しく石濱を掬く。額よ吹被をとる。怀抱等、開
ゆふされば妙真ハ稍あらび、仄く眼を細め、身をうみ良む。胸え曇る有の幽怨
袖よ垣うひて膝あり。傳ふ行潦かづらる身をうみ良む。胸え曇る有の幽怨
矣。あらじかや。まぢ。あまき。影よらんからず、南古那屋の翁蟻崎ぬ。うわも累る殃危の一箇脱れて又一箇。でも
怪の風雲の降集程々えべり。櫛をのばす。そのぞ骸、樹杪よ掛らる。

地を落し次りや軀を引裂かし七段八段となつて今下がる重身へれあくま
少と向かへ又潛然と泣沈め文五兵衛もあら落す涙の鼻をつましく否
船九郎を引裂かせ骸が彼处より大八の親兵衛が往方へ知ゆずかねど。
頗る渠は小兎か犯せり罪のあめをぬ。夜又歎天狗の所行ありとも兇暴
虎狼の恩根とぞ一く命を絶たぬ。世不神隠とのぞをあく速けれハ一両月。
遅くとも兩三年不ハ還さうきのどよ歎くハ渠が爲ゆを神よ祈り佛を念と
かくある日を俟ヒ今とく猶あらが。といひて目皮を押拭へ妙真いきも
遠く大八の親兵衛ハ元方のあやも孫あれども男ハあらけよ心つめくもあらうど
詠りあらう。此處でもありぬ。况小文吾とみどりふ乞とせ。男児一人あら吾舟
曩裏子と娘を喪かくまざ幾日もあらば。僅よ送せ。禪実のひとどゆく
挂替わらぬ。孫え神よ獲られを歎を以て待々死絶ぬ思ひ病麗也。

世ふも入ゆも疎見る。この野の露と消ゆ事。愁ふ呼活られ。強顔忍ひハ余
悲れたる。と身を投げて哽咽亦咳逆る哀傷さと文五兵衛ハ今歎を疾も
禁ひつゝ。照文声を勧して怜憫けれども婦人の臆断時の不祥よ值ば。生
を輕じ死を樂か。亦甚しに惑ひ。吾づくと思惟。大八の親兵衛ハ
鬼神の為よ隠され。今その往方を考へ。取とも決して恙あらず。何とやれ。渠
ハ四歳の小兎か。も原是大吉の一人。大吉の一人。と見ハ伏姫入のむん子。小
等し。伏姫入のむん子。かく。役行者の擁護もあく。觀音隆壇の利益もあく。
されば。そいゆる比父房。ハ。脚られ。一旦息絶う。然ど。大法師。お抱ひ。勿地
誕生。せ。の。も。か。底。との胎内。あ。握固。左の拳をうち。披だく。仁の字。は。玉顯れ。坐
あ。底。の。き。う。や。も。あ。神童ハ船院の中。在り。といふ。も。鬼魅。も。れ。を。犯。め。づ。だ。水火。も。れ。を。損。ふ。づ。ぞ。

凡庸痴呆の童子よ等しく野狐天狗よ勾引して豈溝壑よ死を犯や神慮と
佛力えん旨りと量知るべだりかゆゆも船九郎を屠戮して親兵衛を逐れハ
役行者の應驗のん故余らば伏姫の神靈成神謨ゆどあん彼姫えハ心
雄々あく且孝かく信あり義あり心術と行狀ハ丈夫ゆも多くゆこし終安樂
てゆく。じめいをかむのまは体と脚遺言の趣を今ゆく合せば骸ハ富山よ瘞れて二十年ありゆる塚の
標の松を肥ほも靈ハ必大士のうを護らせめりあべし。まは推量よ違ひをハ他に
犬士と俱かで此度彼小兒をもあへ入ゆく還りく君の見奉る入さんとせし時の脅
き一あく。まゆゑを書イ。まも
わがよありて神慮よ協せめり。且く隠一也るやん。され只是推量のミ當らざ
ひとも枚あり今やうれか夫ひ。親兵衛よ懸あく玉を握りく生ふべきだ。身よ亦
丹花の癌もぞ赤ド孫の為よ自愛して還さう日と俟せ。祖母外祖の愁慕ハ恩
愛の切さるも私の情義めく只そみ一家のうよ深より彼稚兒を失ひづる愁歎の
あらわす。

ハアおあら君のぬよ不忠よ似う支矢不言と怨みられ今この時の不祥
感かく更の不如意よ怒狂ひ。これと腹を切る。死ぬ命を惜むわが死
じて益かねば心を定むく。すがゆふ就く惑ひと解ね。世を憤る愚癡
のうえある。虎の口をあま。だんご。文五兵衛ハ言下よ悟りく亦共侶かど慰やる。
妙真僉よ涙を歎りく蟹崎ぬの白地す料りせよ如くかぶ後憑くく偽れども。
過世つゝ業報多子え孫え失ひ。まよ身ひとの薄命ハ樹枝よ離れて
猿猴ゆ及ばぬと少へて後の衆よあすわん。あ惜くぬ命をれども死
れぬは罪障の。よも深犯故あべ。吾僻か身の暇をあを前から髪を剃
捨く斗敷行脚の比丘尼と般ぶ萬よどく親兵衛よ環ゆ。日のあくあえ臂
素懷をぬ遂びと旅す旅す野すの尾ハ獸を肥せしも罪障章は消滅
せば後の世とやそあべれ。安房へ多く要す。といひとく目を拭へ文五兵衛も

堪忍て頻々弟をもかげり。照文安く頭をうち掉り剃髪のまゝと爲れが先。
却ち不覚行脚して孫の往方を索んや遂に多く且危。えびとおは
市川より宿所よ還らば船九郎が謀計の悪棍轍漏せよと又横暴よ
根を含て寇見と謀す。かとバ宿所よ還るも危一一旦安房へ走る事にて
後よ進退せ國司の仰よ後ふ身ハ免もくと危うべ。又大八の親兵衛ハ神明仏陀の
擁護よあく。雲よ駕り空を翔らば今や安房よ赴たる欲あれも亦知らずべ。
綬あるあくとも辛一とねくまつ大士を途み失く。祖母も俱して邁び。
何を證す云々と君よ第えあぐだ。あを只見るがうのをやせ。進退を
某が身可も係るやうか。がまもよ言せず。舊引く。聴れ。ハヨウ余運も
是をあらそひ一大士を失ひ愁をり。者ん進てハ里見殿かまく解入證もく。
是をあらそひ一大士を失ひ愁をり。者ん進てハ里見殿かまく解入證もく。
退むく。大ふよゆく。面を向ぐ。進退あよ谷り。自殺ちよ外よぞ。

事情を爲ひ汲で入とも身とも謬さば行脚の功德もとの甲斐あらん。あぐ
深念を決めてよと理切く諭せども妙真ハも解ひひゆて文五兵衛と相譚六
きと。また三そあまえのまわらひを。又五兵衛と相譚六
少も訛らを眼を睁く。蟹崎の宣下趣理りか。とあとや。現市川へ還れ
事う。あら。留ひ。事う。ふく。さく。きは。
危く安房へ赴け。惡棍ホケ餘毒を避るよ究め。今まう歎みてやあう。有
あり立まれ。竊よ武藏へ赴くべ。ごく道徳と大士ホシ夏の趣と報知て。
又立かて。市川より苗守の宿とも打々訪べ。時宜よすが安房へあたへ。左右も
隨意あべ。長食議セバ小夜の更入。今宵の宿り人急だ。と言葉せどく
身よ對面を定め。その時を別ハかずあると。亦只彼地よ苗守とも。左右も
まか。ゆゑ。あら。も。こよ。ひと。の。と。と。と。
勧レバ妙真セバ頷だ。照文あく歎びて。あら。月の沒ぬ間もくと
誘引立く。舊の大路へ赴く。妙真ハとの道次。文五兵衛をうへて。とく
そもそも痛す。然依介がゆく。渠が心を。淳樸か。他。蒿工ホシ立優り。

主の為よかだ祀の入よかと旅れども渠れバモ途あでもそ愁ふ得し者る。○寒いにき
○あくへりをひ。○あくへりをひ。○ふびん。○かきまく。○ざんぶ。○えんと。
お可憐金を墜したれ不便なりをけどつむて涙モハ文五兵衛も嘆息して。
えも余ともお爲心急がゆきともせ骸を埋めハ狗鳥の傷らんとして。
えんがやせ事と相譚よ程よ聊先よ進もう照文されをうめすく現彼依介とも
小廻ハ大敵をもく法也。去りを送る杖をう揚く且く防戦ひ。其处よ金を
隕せ。○わう。○ぎかく。○あく。○まひまう。○のう。○のう。○のう。○のう。○のう。○のう。
義僕もみせ骸ハ今竊よ道次よ理置て後よ改葬スベ。○づ
彼处ある。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
立在うつくと透るよ額の素。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
一個の人立在うつくと透るよ額の素。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
背の高大ハ下祇の包物を負るあり。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
依介よ似うげま妙真遙。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
あれ。○うけ。○うれい。○あく。○みどり。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
彼元々依介が冤魂の頭れ。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。

共よ念仏も程よ照文がおもく。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
よ。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
よ。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
よ。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
眼を定め。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
眼を定め。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
原來。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
嚮よ思掻。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
ひつ歎。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
微笑。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
暴れ風雲。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
四下。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。
す。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。○と。

関東の俗

見

四五才
あらわし
きと方と
きと方と
かと坊と
かと坊と
かと坊と
かと坊と
かと坊と

僧坊の坊
かと坊と
かと坊と
かと坊と
かと坊と
かと坊と
かと坊と
かと坊と

或ひ擊れぬ。ひく。歎歎。ひく。拘れぬ。ひく。樹下。立在。而立。樹下。立在。而立。

捕々。恙ひ。面と。あへ。まれ。疼痛を忘れて。足も進む。只この中。坊主の親兵衛。

えみ。ぬ。ひつ。かど。と。向へ。妙真目。と。持々。大。ハ。う。よ。就て。ハ。主。

多。の。話。す。ふ。怪。空。う。か。く。と。な。す。依。介。驚。び。く。矣。亦。甚。麼。か。り。わ。く。と。

向。を。照。文。う。ち。滅。く。途中。の。雜。談。究。て。益。く。古。那。屋。の。主。人。ハ。ひ。ゆ。く。と。選。

ト。を。五。か。年。ハ。犬。江。の。祖。母。と。て。兩。人。南。よ。赴。人。よ。五十。か。至。鳥。帰。入。早。

幸。か。る。名。栗。を。安。房。を。ゆ。く。邁。六。心。す。ゆ。す。が。かれ。今宵。の。宿。り。よ。意。ぐ。

古。那。屋。の。主。人。よ。彼。地。の。ゆ。ハ。曩。裏。よ。示。一。か。せ。如。く。彼。人。よ。言。信。え。脱。落。あ。と。ト。あ。る。ぬ。

え。や。と。な。と。文。五。兵。衛。笑。累。ば。と。ハ。笑。う。や。モ。ク。笑。べ。太。江。の。阿。懷。ま。ぶ。よ。獨。す。ひ。

王。あれ。ど。も。それ。彼。地。よ。り。か。り。ゑ。バ。苗。守。も。折。々。ま。め。く。安。房。へ。邁。く。安。否。を。問。ひ。や。

物。を。お。年。よ。氣。か。ぐ。逗。留。あ。え。と。く。ハ。妙。真。う。と。ハ。げ。よ。と。六。才。る。も。荒。別。お。を。曆。だ。

歩。と。り。と。ぐ。と。も。あ。う。と。跪。た。る。秋。の。暑。の。堪。う。れ。今。霎。時。の。程。か。く。病。が。煩。ひ。

ゆ。か。と。あ。う。と。付。き。バ。頸。を。く。腋。く。袂。く。袂。と。分。つ。よ。ん。情。由。と。ぬ。ぬ。依。介。も。惜。む。名。残。

異。か。で。路。ハ。異。か。る。北。南。別。れ。か。く。急。だ。き。余。程。よ。文。五。兵。衛。ハ。の。宵。初。更。の。比。

家。の。ゆ。び。及。す。市。川。老。走。り。か。く。里。の。形。勢。と。窓。や。は。殲。そ。轟。る。れ。惡。棍。か。有。繫。よ。公。聞。と。憚。

ひ。う。し。還。ら。ぬ。苗。守。か。う。婆。久。茅。と。續。く。細。火。燈。火。下。よ。ぞ。し。これ。彼。志。く。與。タ。れ。ば。

僅。ま。き。う。と。安。く。と。獨。づ。り。く。や。や。行。徳。の。宿。所。よ。か。く。く。浦。船。よ。乗。え。う。と。ぎ。よ。

夜。の。更。く。う。船。と。轢。く。公。送。く。よ。だ。ま。う。り。水。行。と。進。え。と。案。内。知。る。と。か。し。と。か。く。

一。般。の。快。船。と。偕。と。き。へ。足。と。や。う。嵩。工。と。倍。く。武。藏。と。投。そ。漕。と。よ。し。又。照。文。ハ。

急。ぐ。と。ほ。と。行。伝。ハ。老。文。か。う。疲。負。か。辛。く。二。更。の。比。大。和。田。の。里。よ。宿。投。り。是。す。

ひどくのみちを みましむ。と
日毎五六里の路を進そ上總より赴き異く安房より著ぬ照文妙真が
この下に詰謀か。案下某生再説犬塚信乃大飼現へかへぬ六月廿四日の朝未明か
いぬを乞ひか。おあぢ
犬田小文吾は送られて船路遠くと六里許宮戸河より北の千住河を涉りてその
日未の比及よ武藏國豊嶋より神宮河原より著す。おはう。おはう。おはう。おはう。
詐謀く村兩の大刀を奪せ。ああけを豫てあり現ハも小文吾も傳笑ふ
實バ又今もよめ合して俱よ遠恨よ堪えを以て死はる。神宮岸小
舟を繋なく旅宿のうを相譚す。信乃は其く沈吟しきこの處す。舊里へ一里
ありもあえぐんもとも豫て報る情由あれ。伯母夫許赴たる。さればそ
このよりから黒人、農夫かまれば漁者の三絶く客店を離て。あやう西南のさ
二十町許かく滝野川とく村す。この村より金剛寺とく古刹。舞才天の靈地。某
八九歳かく時母の為か祝祷してゑづく詣て。あれバ案内はく知れ。簡様こく
身矣塚カ。莊官の令甥とく子をひまじめ。と問ひて信乃ハ驚かひ。そ
とく身矣塚カ。莊官の令甥とく子をひまじめ。と問ひて信乃ハ驚かひ。そ
人をつくら年齢ハ五十あり。六十よりかく。舊う携の單衣を被ひ。あ
一挺の藻刈鎌を携う。その面龜惡棍とふと既よもがく。知られど
愚果ばくもあく。現ハ小文吾よ目を注て進そ對ひて莞然とくわ一笑を現す。量
せくもどくあれ。墓六ダ由縁のゆれ。抑和美何人ひとと問えられ。もか微笑もく。
忘れか。一矢小入へぬ。比綱船を貸進らや。船主坐をひかれ。名ハ稽平と。されど
土地より漁者かれども年老く子もあれ。今ハ綱引の業せや。ざれ漁船を舟
いちゆきあら。おあら。おあら。おあら。
一二艘持れ。備萬工をく入よ貸を生活よして。そく大塚の莊官ち漁權を

おうやく彼僧方を旅宿させ。世を潛がよ究竟かく。且大塚へ遠かね。額藏の
莊助と往来ふ。便す。あれを捨て。八戸田もう。驛路八戸遙かり。滝野川をすくわ。
といふ兩人詰ひく。舟一岸よ上る折。三個の賊夫水際より立つ。やく信乃を見え。そ
れ身矣塚カ。莊官の令甥とく子をひまじめ。と問ひて信乃ハ驚かひ。そ
人をつくら年齢ハ五十あり。六十よりかく。舊う携の單衣を被ひ。あ
一挺の藻刈鎌を携う。その面龜惡棍とふと既よもがく。知られど
愚果ばくもあく。現ハ小文吾よ目を注て進そ對ひて莞然とくわ一笑を現す。量
せくもどくあれ。墓六ダ由縁のゆれ。抑和美何人ひとと問えられ。もか微笑もく。
忘れか。一矢小入へぬ。比綱船を貸進らや。船主坐をひかれ。名ハ稽平と。されど
土地より漁者かれども年老く子もあれ。今ハ綱引の業せや。ざれ漁船を舟
いちゆきあら。おあら。おあら。おあら。
一二艘持れ。備萬工をく入よ貸を生活よして。そく大塚の莊官ち漁權を



皆三度ハ年中又幾遍とあり。あよ水獵ある山折ヨリ網船を貸進らセーモ。年来えたりやう只見身とハ昨今れども忘れもせず。この月の十六七日にはん身二個の土役と共ニ莊官より携られて漁獵ヨリ來ゆる。その折小人當ニ莊官より來。彼ハ已が妻の甥カ大塚信乃とみゆき。あれハ里人あう網乾左母二郎とひきあひ。かく報を乞バ定うよ知り。その日ハ莊官の過失く船ヲ浪落セキ。本人身がつも精悍ちく被あけり。あくびや叔も大塚の凶変ハ心苦一死すか。彼騷動を外り。何地う邁。かくと真実もく異け。信乃ハ再び驚起。現ハあればどのす。あれハ殺生を好ぬ心より。多々く画忘れ。疎ま知ら。ぞくいゆ比伯母夫よ俱せし。あよ遊び。次の朝吉倚ハ下總よ赴。彼处の友よ送られて只今。かくあされ。何うもあく。かく大塚の凶変とハ何う所以モ。まほ。と向ヘバ。猪平頷。かく原来彼件の趣を露。やうも知らず。まは。かく興

告。ね。お形入る事。と先ニ立て己が宿所。誘ひ。三六。芳。目。指。胸中ゆく。穂。や。も。か。と。猪平ハ河原よそ。白屋の門の戸を推。闇く。處を。把。簾子。の塵。と。掃。序。よ。信。乃。現。八。小。文。吾。を。上。座。よ。請。の。肩。地炉。枯。葦。折。焼。く。茶。金。の。脣。を。拊。試。る。心。どう。火。を。吹。バ。信。乃。ホ。ハ。頻。よ。焦。燥。く。手。茶。も。湯。や。の。あ。と。と。欲。く。大。塚。の。す。心。り。と。那。彼。變。と。ハ。り。あ。る。故。と。再。向。れ。く。小。膝。を。進。わ。小。人。も。彼。處。へ。お。な。く。親。く。見。く。う。か。ね。も。か。の。不。風。声。隠。れ。か。れ。ば。笑。る。隨。の。趣。を。物。く。土。代。木。五。倍。二。み。ふ。砍。られ。即。死。と。ひ。の。折。莊。官。の。小。廬。か。額。藏。う。猛。屬。役。軍。木。五。倍。二。み。ふ。砍。られ。即。死。と。ひ。の。折。莊。官。の。小。廬。か。額。藏。う。猛。者。が。遠。方。あ。り。帰。あ。り。と。主。の。怨。を。報。ひ。と。ど。宮。六。ぬ。ハ。當。坐。よ。數。れ。く。五。倍。二。み。ふ。浅。瘦。才。瘦。わ。も。も。と。負。か。う。辛。て。逃。せ。う。縁。故。を。尋。る。ふ。彼。陣。代。の。威。勢。を。莊。官。の。獨。女。を。娶。う。と。約。束。せ。ふ。れ。す。先。ニ。息。女。の。母。御。が。左。母。二。郎。小。約。

一。婚よ先どひひを一を猛よ変改されしへ左母二郎ハちく怨もその宵鶴小
令弱を略奪て走りて圓塚山東をねぐれよ令弱濱路とあゆん。あそう
役公や左母三郎は殺されしと痛おなすよかん。亦折す亦誰とも知らず。
左母二郎を撃て捕く首を樹枝は伐棄て云々と書送しう。只左母二郎のミ
ヤア。土太郎加太郎井太郎がどぬとう三個の破落戸えよがれ山路は殺し。
土太郎ハいゆ日よ被囚船を漕へ。傭蒿工でシバ大塚ねよ識られり。
或ハシ加太郎井太郎ハ旅轎を昇められ。左母二郎は傭とも濱路とて
駕へ。又土太郎ハモの夜う。莊官は懲り。左母二郎を追蒐来て俱み命を
隕せ。就中悔へ笑く。心苦しけ。額藏男の薄金か。主の仇人を
轍ひきじよ敵よ特ふ威勢。陣代り属役。方ざまよ誣られ。あす
一切聽き。背介どう。老僕とむ。獄舎は繋れ。けり。程よ鎌倉

。大石殿の下知を受。下田町進と。一個の老黨陣代とて大塚半右衛門
額藏背介を率ひ。日毎の苛責。間断無。とハ被難上の弟。社平と。ふ
壯校と五倍。二があく。怨と復を。笑う。莊官夫婦の殺され。婚姻の宵
令弱を。因乾は奪去され。と婚引の名刀が似ても似つかぬ質物。アヒ。と婚引
媒約も怒り狂ひ。事起り。と。社平。ハも五倍。アヒ。も。死す。絶て。アヒ。墓六
夫婦を害せ。ハ則小廝。額藏。宮六と五倍。ハとの折彼處よ。遇あひ。と夏の
あよ聲。アヒ。と。寒う。アヒ。と。詫う。真夜中。アヒ。と。死。アヒ。それ彼とも。證人
や。但背介どう。老僕ハ額藏。アヒ。と。還り。と。莊官夫婦の撃。アヒ。と。小
浅瘡を負。と倒れ。と。額藏の證人。と。云々と。死。アヒ。と。背介ハ。アヒ。
利のあく。年ハ老う。瘡ハ負う。果敢く。あくも。アヒ。と。死。アヒ。と。死。アヒ。
死。アヒ。と。死。アヒ。と。死。アヒ。と。死。アヒ。と。死。アヒ。と。死。アヒ。と。

ひりと罵るのをか。可惜忠義の社交を冤枉は殺されか。憐む死
えども知傍もあぬ。彼舍弟と軍水を憎みあひ悔みす。胸苦。偏る
身の靈もんかぬく。よせぬね。言葉せきくと見示せ。信乃ハ此之現へも
こぢんご。まわあた。そとく。あだおの。あだおの。あだおの。あだおの。あだおの。
小文吾も驚呆して。す一嘆息あひ。當下信乃ハ歎然と眉根をまく。現へと
ふる。小文吾と見えなく。互に伯母夫婦の心がぬ。と好もあれ。夕もあれ。終角の比翼く。
やかば。養れる恩恵をも。バ良感の涙禁め難う。も額藏ハ之處を去らば。
主の仇人を擊ひ。よふ義の大義。あひゆひと。誣られて命危殆をうふせん。
互に同盟ハ二人とぞ。薄命かぬもの。歎めりくと怒じて臉を赤べ。両
人も亦迷恨の外臂睨詰る。春を捺りて慷慨嗟嘆ハ皆相同じ。されば。被金
鉢兜を術も。俺們兩人彼處より。巴又里の風声を笑定ひ。後少て。どひを
猪平推禁を。各位ハ大塚御より甚麼事由縁あゆ。あねじ漫わか早り多ひ。
といひひきだり。明々地を告げ。わろよ。慄みて。あひとも。をも。せ。そ
ゆく世の風聞よ就く。大塚姫との初莊官の婚びか。然るを
陣代の密議。よろく遠離られ。と世の人ハ云。されど社平ぬ。五倍三坪ハ
脣娟く。ひん。腹心の。の。流言。と。濱路を誘ひ。せ。も。又墓六が追捕す
菴。左母二郎との餘の三人を圓塚山やく。殺せ。信乃。額藏が所為を。喋々
くい。そ。大塚御。や。疑ひ。か。と。往方を索ら。と。大塚の里。余。大塚
ゆ。を。具。負。み。か。され。竊。胸。を。苦。し。や。も。食。あ。汗。を。握。し。ど。為。よ。つ。ひ。く
證の。か。れ。ば。只。舊里へ。え。と。せ。と。念。ど。と。口。を。鉗。く。と。と。彼。里。入。ひ。の。ぞ。か。
小人。大塚。子。聊。相。識。る。の。あ。れ。ば。れ。う。の。も。ぎ。え。粗。笑。く。う。も。と。誰。い。も。が。バ
走。大塚。御。の。友。い。そ。彼。处。へ。邁。く。これ。彼。と。言。問。ひ。あ。と。捕。と。辛。た。め。よ。あ。ひ
あ。え。と。危。一。と。も。危。一。と。も。首。く。密。詔。バ。現。八。小。文。吾。ハ。ひ。く。忿。激。と。堪。ひ

一。身ひくともあらん。身をもあらす。おとと。きやういふ。
され觀くにと忘て信乃は目を注めば信乃ハ腰纏の財布より粒銀五顆とる。
懷紙よりも載つてこれを猪平よ進ゆる。こはと些少の物あれど好意を謝
る。身ひくともあらす。おとと。きやういふ。
身の某のテ和殿より遙近をもかう。故郷の計を笑くのみ。身より係べた
者。身ひくともあらす。おとと。きやういふ。
寛尤を潜ゆる告られ。ハヌクゆく死幸ゆく。安くかどく。今ゆる大塚を還る。
身ひくともあらす。おとと。きやういふ。
信濃ハ母の生國。彼地へ赴く。身ひ定めども。ありよ逗留せむ。
あくび水際よ繫苗方船をこの友人の還る日まで。領りておひゆ。身ひよ如才
あらん。身ひくともあらす。おとと。きやういふ。
あらん。俺们が下僕す。がアーモリのまも。和殿一個の寶よ秘て親した
友よ。身ひくともあらす。おとと。きやういふ。
身ひくともあらす。おとと。きやういふ。
大塚の社官ハ年來の花主。身ひくとも。お身ハ主が令甥。身ひくとも。世の評判ハ舅公よあらん。
賢人君子といひゆ。可惜武吉の薄命。身ひくとも。再會して亦痛。

身ひくともあらす。おとと。きやういふ。
この通りハ近見比まで豊鳴の采地。身ひくとも。舊恩をアセ。管領みハ民親
度。况大石殿の陣番等ハ民の膏腴と絞る。忠義と誣て奸佞と逞
せられ。誰うそれ。德と。死大塚。身ひくとも。入よ知らじ。身ひくとも。
身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。
大塚の陣番へ告訴。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。
折く穀兵のうち巡れば。宿ひ苗進らせ。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。
身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。
身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。
身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。
身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。
身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。身ひくとも。

彼日は限まで莊官の土太郎を傭ひして宣へせり。ありとて余らばつてうれ
み。提ふる船を漕ぎ、久人八年老く生活す。懶惰無能。人のまかくせざりとや。只
兩個の猶子ありて、二個の名ハカニ郎一個ハ尺八とあれ。近頃比あよ来て佃主
文日を送れども、仕役剛毅の壯俊あれ。舊領主豊鳴殿の威をさうの歎美。
扇谷の管領家を除く。忌憚氣色也。况大塚の陣番が、どハ脣ともなし。どよ。
彼ホガ言を慎めで禍を取る。とやあんと多バ小人教訓。とあく敵うる。
余後ハ罵らびども志ハ今は撓ば。あすア戸田へ捷徑。彼ホム送らせ。彼ホ
蒲螺をとり揚々吹鳴さんと。程現八小文吾是を禁め。をす。誠六
感ちる。あまうあれども吾俗兩人もと送り。あまう。甲斐よ行侶へ
そいかだ。あまう。人を増さば。あまく。視よう。あかとあがふ。えりく。
あまく。隨意あまうと。应く。恥く。蒲螺を舊の柱よ掛け。當下信乃洋の
銀を。あドの海をよさ。寄く。嚮やもあまく。ちやし。とく。頑か。これぞ納め。竊
主の応答。と。氣質を察。はよ。浮世をあまく。蓑笠よ避く。この水濱よ隠れ
あ。欲昔。やく。くいと。ハ措平額。を附く。否。あふ。はふ。そろそく。時。まば
か。武士の禄を食う。の。本姓ハ媿雪。へ。舊名を。世四郎。と。形。ど。下司。ア。と
智。愁ふ。と。あて。舊里かれ。この處へ追退。けん。山。小人。相識。老丈。年。ア。と
上野。から。荒芽山の麓。は在り。と。近属。灰。す。安。を。う。倘信濃路へ赴た。鳥。訪か。宿。セ
投。ア。便。も。わ。と。豫。と。よ。一通。を。写。り。も。寫。る。肩。又。え。ア。三。ち。ら。の。手。と。書。加。書
う。と。真。実。あ。と。身。を。起。と。棚。の。隅。あ。と。と。脚。を。塵。埃。深。る。硯。を。吹。て。茶。碗。残。る
茶。を。滴。む。墨。へ。曲。も。ど。と。直。丸。黄。軸。の。秃。筆。抜。か。と。眼。鏡。の。玉。匣。ぬ。と。セ。よ。ア
船。日。記。の。末。ア。白。紙。引。裂。て。走。書。と。一。通。の。状。や。共。よ。卷。筆。く。飯。桶。の。簀。蓋。交。揚。て
撮。ア。方。飯。粒。を。封。て。標。識。を。書。ま。しつ。大。塚。印。是。ハ。これ。ど。も。無。礼。か。る。よ。ぎ。れ

ども心事あると。まふこの一通を委ひあらん。荒茅山の麓と風の便よやうるの。送ふ年來疎遠か。彼处へゆき、邁てもすゞ。とおつむだに。必ずしも必詣のやう。老嫗の名を音音と。すゞ。物とそーがめ浮世よ遠た山里かれ。逗留を要す。けへあ。さて。憑きまよ。と被く恭く件の状を遞与よかん。信乃へぞく。愛うていふを趣あらぬ。遅速ハ定か。なども信濃路へ赴く由縁を言て。夙と和殿の所望。うづく。些の物ハ肩受か。とゆよ。信濃路へ赴く。信乃ハ件の一輪を。且く領りまん辱。と受ひ。紙よ折りそと。修は硯菖よ納。信乃ハ件の二輪を。懐ふ挿て。現ハ小文吾共侶。謝を述別を告く。おのづか。笠をあく。南を抜く。おのづか。稽平ハわゆかよ。門傷よ立て。目送りくる。

第四回

夾剪を搬く。犬田進退を決む。
額藏を誣く。奸黨残毒を逞む

信乃現ハ小文吾ホハ稽平グ宿所を辞へ。去く青田の壁五町南を望てゆく程左よ細小切岡ありて。樹粒隙きく。生茂リテ。且くあやと立す。存一株よ尻を。きく。さび進退を相諭。信乃ハ哀く嗟嘆。て某曩裏央神宮清光村兩矢矢を。盜れを知。諒我殿。罪をぬ。今ハ又彼河原モ。稽平モ邂逅して。圖。資を。ぬ。縱大塚。赴た。街談衢説。と拂とも。誰。亦彼。ど。曲。告。あ。元。現禍も禍を。福も亦福を。世ハ塞翁が馬。を願。す。彼。稽平。人。と識の量あり。欲。され。信。あり。義。あり。と。せ。疑。そ。と。ち。く。と。一。翰。を。委。ん。や。書。狀。と。輒。く。詫。一。あ。ら。あ。う。そ。の。所。乃。か。ん。十。室。の。邑。や。忠。信。あ。傾。益。故。舊。の。如。と。辛。ま。房。先。も。こ。う。伯。母。夫。婦。の。横。死。ハ。多。ひ。み。か。死。タ。シ。み。づ。釀。キ。禍。ゆ。つ。と。一家不幸ハ。あ。は。じ。ふ。是。某。が。不。幸。か。濱。路。も。亦。憐。む。べ。渠。愁。ふ。節。義。を。守。り。く。親。を。も。身。を。喪。い。歎。往。事。ハ。あ。は。悔。て。も。及。び。そ。額。藏。の。莊。助。ハ。之。の。罪。を。あ。は。じ。て。

今繆繼の中より大飼犬田と重れかゝまれ某ハ從角す。彼人と義を結びて死生を俱よせんと誓へり。況又伯母夫婦の仇と立地は數々うそや術計共よ空しく勢ひ極ひゆゑ。共侶よ死ぬを他よりかゝどもひ入る具くと現ハ小文吾等あへぞ。その述きの後、大塚ぬ。和殿一個のうのをかゝる。其すが犬川生よ事く面識か。とも玉と癌とを落ち。既よ異姓の兄弟ニ財をそそぐべくハ盤纏を竭て共よ計え又智力ぞりく極べく死を共りく相資人親疎を論ぢとくと辞等く愁はば信乃ハ莞尔とうら笑て。おきあつおは。

刎頸の交りハ。されば親疎あでたかねど某ハ就中故舊の微意を演ふるを腰や。船をひかひと両支かくを勧め。幸ひ尤甚て。あれども犬田ぬ。假初よ送り来く。逗留あり地より日と称りバ親を忘まぬ。似う和殿ハ船を乗えと行徳と市川へ元の。うど報也。さうじハ彼人の待ふびくさと抱きあん。還り更と叮嚀よ諭セバ小文吾頭を掉く某も親の事とおざうよあらゆども彼處ハ既よ無う。されば大急の

難義。舊里入よ待し。と立えとぞやまび來バ竟よその期よ合せ。と轍駒を枯魚の市よとん。豈是ぞ。義とせんや。且大塚の城中へ親しく交加ちとゆく。何と便著。大川生。極ひ坐とをぬ。大塚ぬ。勿論。大飼ぬ。或説我殿う。との沙汰。彼處へ坐え。欽られ。亦知るべく。されば城中の為体を日毎よ窺知。死ぬ某か。誰か。是を更今來。途の田の壁や。この鉄を拾ひ。鉄へ進そ物を剪れども退く。是の功。剪ハ鉄の本字ゆ。鎧櫛。前の字をも又剪の字を書く。前後を考。ひそくこの義を取り。とぞ某。總角。かく。比。跡の師。う。人。ひ。ひ。鉢。鑊。などの農具。や。田の壁。よ達てもあらあ。でき處。ゆべく。この鉄を拾ひ。前を仇を前刀ると。字十。占ひ。とぞ。い。か。歡び。く。と。揚。く。然。て。今。行。徳。退く。と。大。鉄。の。功。か。事。既。よ。奇。異。れ。ば。ま。す。ゆ。び。思。惟。よ。某。ハ。縁。と。求。を。被。城。中。よ。入。え。と。度。も。商。賈。を。よ。打。扮。を。ハ。忽。地。人。よ。怪。し。ん。す。ぶ。つ。この額。變。成。

剃落をハ便あらす。ちよぢよどり剃刀取。今この鉄を獲う。一ハ亦もく。幸ひかが。まがみの既に決せ。兩友と共に進むべく獨故郷へ退くべし。左毛をうけ。引出と額髪を。おほき件の鉄もともとみ落しけり。信乃現八百石毛を。存一感して遂に禁や。犬田主天田ぬ。鉄の譬喻ハ究も妙なり。がまぞをぞ死前象を。そぞうとの意は任せざん。もとより迹は長短あり。利平さく。ゆひ。とぞ小文吾歎びく。ともとあくと抱くも。鉄を現ハよ遞与よせん。もへ向ひとほそりよつねく。もとみ送セ。額際を送もか。引を。前日剃。月額と朝ド程を。あくわら信乃も側。左見右見。く適微妙く。宵。夜。姿を寝ほ。便す。誘。計。かく。淹野川へ赴ん。とひみと。笠をうち戴。と。両。合。笠をぬく。後。足。跟。先。立。舊の坂畝。立。皆。巴。日影。落。視。也。遙。方。戦ぐ稻葉。風渡る下。晡。す。やうふ。たう。かく。件の三。大。六。金剛寺。よ。赴。望。く。岩。

窟堂。す。詣。て。辨才天。を。黙禱。しく。食堂。す。あ。終。と。呼。門。へ。寺。僧。迎。く。來。意。を。伝。ふ。あ。死。去。の。き。問。う。當。下。信。乃。ハ。進。三。す。く。某。ホ。ハ。辨。才。天。す。宿。願。す。七。日。參。篭。走。く。も。遠。方。す。く。す。ア。休。息。所。を。貸。與。く。バ。幸。甚。く。か。ん。と。す。か。る。す。折。く。あれ。が。寺。僧。ハ。聊。も。く。疑。を。そ。ハ。い。易。だ。す。そ。姓。名。を。向。住。所。を。訊。す。実。を。告。ん。は。ま。だ。老。三。士。を。あ。が。で。名。だ。の。ど。あ。か。り。某。甲。某。乙。と。慢。よ。名。告。う。す。く。寺。僧。ハ。賓。て。信。乃。現。八。小。文。吾。を。客。壇。比。側。か。り。子。舍。す。安。措。を。く。タ。膳。と。羞。る。程。よ。ま。黄。昏。よ。か。く。か。く。三。大。士。を。縁。頼。す。あ。も。と。う。れ。し。庭。ハ。石。神。川。の。流。せ。も。く。水。清。く。山。高。う。だ。茂。樹。青。葱。と。て。瀑。布。あ。奇。石。多。か。り。夏。を。忘。る。佳。境。か。れ。ど。も。心。の。夏。憂。ハ。山。水。を。う。め。え。く。慰。心。か。く。も。あ。べ。傷。よ。人。の。を。び。か。れ。ば。三。士。ハ。再。額。を。聚。や。く。あ。う。大。塚。へ。ゆ。れ。か。ま。辯。の。便。宜。を。相。譚。す。信。乃。ハ。後。方。を。え。く。す。く。某。ハ。彼。里。入。す。冥。く。面。を。識。矣。れ。ば。夜。艾。か。く。で。ハ。赴。た。る。一。兩。友。ハ。白。晝。と。ひ。そ。り。里。す。相。識。る。入。の。か。れ。ば。後。ゆ。見。

又かゞ郷導の為爲バ今宵ハ某犬飼をねく潛ゆるよ邁てそん三人共宿セ
そも一人も岩窟堂よ通夜セハ法師們は怪異人且神仏を欺くよ似くころぶ
愉うべし。今宵天田山り也犬飼生を先に死ハモ実父の墓彼處よりアモ
ウを償せんぬ。愚意よ徒ひもんやとつま兩人領だくみ議寔すを度べ
とくと急ぐ寺僧共岩窟堂よ通夜後とゆく外よ如れバ既ゆく日ハ暮
うき程よ信乃現ハも辨天堂を潜ゆく足よ信して急ぐ程よ宵闇を覗バ入
遭ば瀧野川より大塚まで。道二十町よ過がる。もくも莊官墓六ヶ宿所の
ほりよあくらす門おハ竹の柵。裏面ハ人影ありともぞ。今夜よ
浅かくて嘆息。退びく。前向か。細乾が宿所を外のかまう。視く。
現ちも空房よかり。この處ハ之の初糠助の宿所。と信乃が告る。現ハも
懷舊の涙を禁あらず。家ハむづの後とゞ々く親の面影ハ夢よも見る。

かとぞ咽ぐ。さそあぞ涙よあづれ。信乃ハ現ハが袂を引く。親の墓所。參
サ。かわを。おきと。そろ。おきと。おきと。おきと。おきと。おきと。おきと。おきと
詣を祖母と番作。東の墓。ハ里人。かげ齊貺。やん水。涸れ。櫻。あり。又
十歩。左の。近属葬。と。齊。墳。壇。兩基並び。ゆも。墓六と
亀篠。殮。瘞。あ。や。絶。櫻。信乃ハづく。之の德の厚
薄。死後。必。死。親。伯母。の。用。し。就。親。錦。被。夜。故
郷。帰。と。諺。も。劣。ハ。か。不。肖。許。を。史。と。之。ぐ。う。二。親。の。墓。祖母の
墓。被。新。壇。堂。水。沃。捧。草。伸。曲。々。祈。念。擬。セ。現。ハ。と。後
方。よ。跪。か。念。く。回。向。夏。の。夜。更。初。う。か。く。又。信。乃。ハ。現。ハ。よ。賓。て。糠。助。が
墓所。赴。く。夫婦の墓。櫻。ま。よ。糠。助。身。あ。う。比。信。乃。が。墓。な
え。勧。く。香。華。料。寄。セ。ぶ。菩。提。院。植。現。ハ。信。乃。恩。信。感
涙。と。拭。ひ。あ。へ。ぞ。水。没。櫻。向。追。慕。の。哀。ゆ。く。も。地。上。平。伏。

勵矣。て時の移るをあくばり。名と信乃も有繫。は懷舊の淚を沃だ。、俱とも祭るよ田舎の墓所ハ寺内おあり。むとよトまわ。かることなし。也自在。小夜更れバ寺よ詣まつで。信乃ハ又先よ立たつ。額藏がほが母の塗城行婦塚みゆきを現あらわ。と共とも祭まつし。との子の為ため。災害消除さいがいじよを。あらよ古遠く。禱とうる。あくべ之現あらわ。甲夜の間ま。墓六むろく下件げじえんの風声ふうせいを彼此うちよてうち。す。精平せいへい。告ご。

細切ざいせきふ及いた。言大おおさハ異こと。而ひ。程ほどよも。廿四日じゅうよの月つき高く升のり。と。又三さん翁おきなと。多比行婦塚たひぎやを祭果まつが。信乃ハ現あらわ。共とも宿すく。の曉あけ。滝野川たきのなかわ。岩窟堂いわくどうを。ぞくへ。け。小文吾こぶんごハ信乃現あらわ。ふ。妻めの趣きを。も。變か。然ぜん。び。翼つばさ。見み。れ。や。ん。そ。竊くわぐら。よ。示あらわ。合あわせ。程ほどよ。天あまハ明あく。朝あさ鳥とりの啼声うなり。寺てら。早飯はやめ。と。果ご。は。や。が。小文吾こぶんごハ亦現あらわ。と。賀たまか。と。大塚おおつか。よ。途と。か。農家のうけ。と。手て。權ごん。現あらわ。獻ささ。竹鎗たけのこと。弓箭ゆきのこを賣うり。あらわ。麻まと木縣きくにを載のる。も。あらわ。と。小文吾こぶんごハ。この處ところ。麻まと

木縣きくに。十四五じゅうご丈じょうと。芳草よしと。被は。買く。と。信濃路しなのじを。ど。あり。そ。す。商旅しょうり。打うち。扮はん。マ。現あらわ。と。先まへ。立たつ。大塚おおつか。よ。赴たつ。と。現あらわ。と。笠かさ。と。くく。と。す。の。入いり。と。脣くちば。潜くわぐら。と。と。言いふ。貰う。家いえ。も。見み。れ。と。あ。日ひ。も。亦。行ゆ。帰か。塚つか。番ばん作さく夫婦ふうふの墓は。糠助こねすけの墓は。よ。詣まつで。と。小文吾こぶんごと。共とも。見み。れ。と。祭まつし。と。同ひと盟めいの義ぎを。も。く。親おやぢの如ごく。子この如ごく。祭果まつが。と。親おやぢの菩提ぼだい院いん。よ。赴たつ。と。往むか。持もつ。と。對たい面めん。と。糠助こねすけが。奮あふ裏うら。か。す。と。告ご。て。布施ふせを。も。め。を。と。程ほど。小文吾こぶんごハ。玄くろ闇やみ。と。亮あ。と。現あらわ。と。住持じゅじと。難むず。設つくり。と。序じょ。と。墓は。と。六ろく。と。之の。趣きを。資あつ。る。小墓こぼ六ろくハ。宮六みやろく。數かず。と。龜かめ猿さるハ。五倍ごばいニ。と。殺ころ。と。糞こり。と。又。額藏がほ。と。向むか。と。城中じゆうの沙汰さわぎハ。よく。も。あ。う。と。當あた下げ。現あらわ。と。膝ひざを。進すす。と。某もし。同ひとの商賈しょうか。と。大塚おおつかの城中じゆうへ。出で。入い。と。頼たの。へ。と。紹介あいせつを。許ゆ。と。あ。幸さい。ひ。か。と。そ。他ほか。と。も。く。請うけ。求め。と。住持じゅじハ。布施ふせの。多。い。愛。く。疑。す。氣色きしきも。く。大塚おおつかの城中じゆうや。些すこの。擅越せんえつ。か。よ。と。街まち。か。あ。巴あひ。の。づ。と。好財主こうざいしゆ。と。あ。う。と。あ。よ。と。さ。み。の。入い。と。對たい面めん。と。小文吾こぶんごを。召めし。と。と。

城中より檀越の姓名を記す。又実一枚を與へ、テ兩手で御恩を謝し別を告ぐ。小文吾ハ大塚の城中へ赴き、現ハ金剛寺へと至る。信乃はけの首尾を告ぐ。小文吾既に城中へ交加して、信乃ハつゞく隠れて又大塚へ赴く。モ現ハちて折り、所見。阡陌の風声を揚る。扇谷山内の両管領、近に比許我の御所と和睦を結ぶ。物語れ。送る狐疑あり。大塚の陣番が、信乃が姓方を索る。許我事。穿鑿りゆき只のかうすをあわてて、捕縛人と謀ちのを現。ハグリヤハ絶て傳へ。まづまづと今程より小文吾ハ日々大塚の城中より赴き。麻と木綿を賣る。每季價の少く拘りひば廉うびとなり。されど、彼此よりともぞさん。知人もひて來。一ヶ月の正日より陽交え、懺舎の光景をあくよも額藏の莊助を竊出。便ひがれども、肺肝を摧はざる。城中に入ることをゆく。おじいごくの日を裡され。かく大事を倉卒に相譚べた。あいだもわづば。よそくちう程より夏をあざむ。客宿す。

過て秋とし火バ鬼悲。七月朔日より小文吾ハ嘸音。大塚より。かうき。おのれもあむ。まづ信乃現。ハと團坐して、竊み城中の沙汰を報る。又憤胸。満てうち父毎。少く。嘆息。堪え。限りともりよ。便宜の進退を定めん。そ且く。閑談。ち程より食堂より。膳を羞ひ。けふ。當下信乃は寺僧より對ひく。前月二十四日より某が七日参籠。今宵ゆく満願。やうか。モハ明朝已の比及よ身の暇。とひ。是もハ屬日也。あく。參籠。今宵ゆく満願。やうか。モハ明朝已の比及よ身の暇。とひ。是もハ屬日也。五百文を贈り。みづれ。寺僧ハこれを受をひて。ひ。町寧。は歎待。う。日暮て三十六。岩窟堂より。更よ又議。ひ。今この同盟三士の中より清淨をす。の。犬飼の。その餘ハ伯母と妹の服あり。また日来この神窟を談合。谷より。も。神慮。その憚。をす。あく。ねど軍陣や。神を祭る。よ。絶く觸穢を忌む。今俺們が危窮存。七譬。バ。疲馬。よ。鞭。うち。大敵。よ。向。が如く。お身ハ矢石。よ。傷られ。か。一陣を

成るが似たり總麻の服ありとやも。とが身の慾み祭るよわし。バ神ハ免をあへ致
 いで。彼瀑布より被禊と同盟大川生の為よ窮厄解除の冥福を祈也。さへとく
 有一衣を脱ぐも瀑布より身を博ひ。當山若窟辨才天并よ庵の不動明王若王子
 権現と念して丹精を凝ら。追前幽再説巖上宮六弟巖上社平ハイゆ。六月二干
 日の朝属役卒川菴へと共よ拘捕うる額藏背介を緊しく獄舎繫る。腹心の
 等及子等も鎌倉よ等をうるばとの告訴の趣た額藏を誣て信乃と疑ひ社官
 歩卒兩人よ訴状一通を齎して鎌倉へ遣は。往返一晝夜を限り。ぶどの宵初更の
 ら起きて。急行。日未明に現る。官六を殺す。五倍二より負せ。ハ幕六が小廻。額藏が所為。
 墓六夫婦はまゝめり。宮六を殺す。五倍二より負せ。ハ幕六が小廻。額藏が所為。
 ト老僕背介とのものこれを資け墓六が妻の甥大塚信乃とありのも亦多恩よ
 与れり。但信乃ハ逐電してまごとの仕方をあげ。これらより先よとの夜。まゝ墓六が
 女兒濱路を盗出せ。もとが追捕のものを四人を圓塚山を残害して云々と書送せ。も信乃
 ト老僕背介とのものこれ。大塚の城主大石兵衛尉が鎌倉
 金とあつて。金とあつて。金とあつて。金とあつて。金とあつて。金とあつて。金とあつて。
 状訴。仍く件の如く誠惶誠恐とぞ書うるを。ゆすり大塚の城主大石兵衛尉が鎌倉
 郡中かハ老黨を聚合て。食殘わ。これを彼と擇れて出頭人丁田町進を陣代として大
 塚へ遣は。と定め。あくびの情偽と考糾して社平菴へとが訴の趣ある。ゆく
 実を。巴刑罰ハ律の隨り執行を。ゆく猛。余せられ。今町進。次日の曉。よ鎌
 倉をうち起く頻。よ馬を早。やが。十六里を四時の程。よ大塚の城。衆著て社平
 菴。ふよ對面。よ主命と述べて五倍二が力。瘡を撿る。よ眉の上。僅よ一ヶ所浅
 瘍。れ。物のど。よ。生平。あくも。瘡あり。よと事の趣。よ否る。五倍二。苔。某。い。傳
 先日。宮六。よ。俱。それ。よ品草。濱。よ。赴。な。から。と。よ。更。闇。よ。折。よ。張燈。の。蠟燭。の
 そえ。く。や。く。よ。と。を。墓六。よ。傳。よ。且。湯。を。も。よ。と。渠。が。宿。所。よ。立。く。よ。と。彼。

小廻額藏が主の夫婦を砍りて逃去んとこうづけ撃見よ不意を駆れて宮を若黨二人が夫庭より余を隕へう某えよかと趣舍迷恨よ堪へと実りもふ陳へう町進うち多々既ひかくどくかバ事忽みあひとそとの曉皆より廳城前ば殿兵六人額藏背介と獄舎より牽牛して縁頬らしく推居う當下町進をやれと額藏と呼ひて事の顛末を聴問する右より菴へう社平より殿の燈燭見乎亭午のとく明るは殿兵ハ索を牽獄卒ハ杖を揚げとく事の趣をもう上を責め。されども額藏ハ驕たる氣色もかく主の仇人のえ道へかくて當坐す。轂ひ苗ひへ。そのの趣は景裏日安えむがくる如く別よ仔細ひのとく町進声を立せられ額藏汝ハ信乃と謀り合して主の女兒を盜出セーとの宵圓塚山の追捕のみどを砍仆と筆者無名の書を送せしハ人を欺くと欲されえ共。多ぞも計り。風声既よ定まつり。かくも脅とお慾よ飽う主の宿所よ立つて。

錢財衣裳を盗んぬよ莊官夫婦を殺せ折邁あらす宮木と若黨二人を残害して刺痕を負へる五倍二ヶ金悉ひ氣ればのみ口状と風聞と符節を答へ分明あらす汝が外よ誰をさして今や主の仇人とあらわ鳴呼の癖者かと罵れば額藏撓盡だ小膝を進むと憚あそとかれど宣ふ趣あうとぬきと某をその前日よ主の使をうけりて下徳あらかへーの縁故を定まらずねど夫人夫婦の殺れしとこそ道徳充なあら縦ハ簾上殿と擊ひ角れど朋輩よ抑苗せしれ軍木殿と撃漏せしと先邊恨の至りて況彼大塚生六との前日故あらず下徳へ赴たうと五傍輩奴婢を召て向せゑび分明かくも又莊官の貢賈路と豪奪と走り一ハ浪人御乾左母二郎あり且賈路を殺せし左母二郎グ所為あらず建方牌よ記わぶ。それも亦分明あらす。軍木殿ハその身の羞を掩ひ爲よ誣めども某よ卒己前よ主の擊ひと認ひのハ則この背介を五倍二殿よ小髪を砍られて簞子の

下み躰れてあれどかく裏を平地証人あり向せ西。これも亦言明白よんとし。ば
丁田が左右ある社平ハ竊よ菴へと目を指す。冷笑ふ當下町進ハ膝小立す扇杖を
とう直しとや。背介と呼被るよ背介ハ齡六十よ餘りて小髪よ深瘻を負
のまかで辛く獄舎よ繫しむる恐懼ゆきて胃道衰へ頭と戦。領くの果敢
をくハ答うべを町進ハ信とく背介とく。背介ハその宵墓六との妻の聲を定うよ
認一とあ。软件の夫婦を殺せよハ額藏ゆき宮六とその妻の聲を定うよ
夫婦を殺せよハ額藏ゆき宮六とその妻の聲を定うよ
頻ふ点頭のみればまるとあらと町進ハ額藏と化と疾視く不敵の癖者。角
陳ちゆ今背介と糾明とて墓六夫婦を殺せよハ宮六と向ば頭を揮ひ額藏
歟と向ば頻ふ点頭くと心答分明。這奴鞭どへつかく速よ首伏矣。死ことと集爆
うけ事。と獄卒ホハ杖を揚ぐ立かるを額藏急よなうと各位且く等更背介が

頻ふ頭をくわく又頻ふ点頭へ。みる渠が病の所為。その頭を掉んとちと宮六
歎と向ば。努ひ頭を掉る。とくこの點頭んとちと。は額藏歟と問わ
ハ努ひ点頭がとをゆ。その辞を笑ひて只介と。黑白眞偽を決わらか
息出たり。社平菴ハされどそく心地す。あわす。といひぬだらうよ笑片向くそくび背介
づかみ。といひせも果て推伏せ。一百あまり。ぞ撲うげ。憐むべ。額藏ハ背破れ
ひきだ。おもき。きが。皮肉爛れ。忽地氣絶してれ。ハ獄卒ハ杖を駆り引起して水を吹被る。且しく
息出たり。社平菴ハされどそく心地す。あわす。といひぬだらうよ笑片向くそくび背介
うちとす。町進。もぢんかうて。額藏が大膽。ち一朝。や。首伏。もくわ。ば。被背介
奴が物いぬ。額藏を竊よ資て罪と脱。そその所為。之彼奴を鞭。ぞ。とひ
と敦園ハ獄卒ハ暴。や。ふ。又背介を推伏せ。く。撲と。ま。千下。よ。至ら。叫び苦。む
ゑ。を。お。か。ち。ひ。だ。さ。え。声細りく。忽地。ふ。息絶。う。を。そ。う。引起。と。口。中。よ。茶。を。沃。入。れ。く。傀。ふ。息。れ。ま
の。と。又。生。べ。く。お。足。を。く。り。を。と。く。ち。程。よ。と。二。更。の。漏。刺。音。先。が。町。進。ハ。額。藏。



背介を獄舎より遣せよ。背介はとの暁も終りかくあり。あれど額藏弱り氣色もかく罪に伏せん。社平五倍二ハ氣を廻ら町進よ密書を遣し物夥賄賂く媚諂ひとあくとの断獄を急ぎま町進セ赤利の為ハ傾おき小人れバ竊よ社平五倍二を慰め背介ハ脆く死し。既に首伏をれバ是第一の案驗く某亦寝處分れバ額藏を向落走。報彼奴ハ首伏せば。背介が首伏をも證据とせバ刑罰は障りや。今志がく俟ち。とあびやよ回報し。腹心の殿兵両三人を圓塚山へ遣て左母二郎。記せば彼樹の幹を伐らしとれを云う。果て云云の数十字あり。又額藏を獄舎より牽せしと筆と紙をもつて。され即やす。左母二郎と書け濱路と写け天罰仍件の如一六月十九日の宵と書べ。とくとくと右ひの傳を後ふされバ。額藏ハ勢ひ推辞べくわぬ。ひそも隨よ書て。まよとて町進ハ額藏を永く特小

緊しく縛き。彼伐と幹の文字とこれ彼を合して。勃然方高（あたかも）か。あれど。辭者これを知り。圓塚山の樹を推削り。是恩黨因乾左母二三或秘藏の大刀を掠く。又處女濱路を揚撃し。の後（のち）うと怒き。あく烈女を残賊也。天罰仍て免じ。件の如一六月十九日の宵子の初点と識せ。幹伐とあく。汝がる迹と合ひ。同筆か。と疑ひ。かれが信乃と謀。令て濱路を盜器せ。も又左母二郎。小四個の追て。のち。よせのぎ。あく。ある。あく。く免のこと。これを。あく。入を殺して世の猜疑を掩ん。汝云云と書送せ。も又免。汝が所爲か。世の風波と呴含せ。彼處よ濱路が死骸。されば豈左母二郎。小殺。もく。汝が。信乃よ濱路をねて走り。うち偽書ハ汝が作意。この一條。もく。推波よ墓六夫婦を殺せ。八宮六倍二。あく。と。ゆ。汝が奸詐頭。然う天罰件の如一と書。汝の自識とあく。汝を敦園。悍く詰れども額藏ハ些も擬議せ。汝の宵の事ハ云云。とく。解く。とく。程よ町進ハ。ゆく。呼く。兵共彼奴が骨を抜く。首伏をせよ。汝が骨を抜く。首伏をせよ。焦燥ハ獄卒。小阿と應く。額藏と

筋木の上より推仰向括著て目口も口も大に被る水ハ垂水の凍解する霜より
間を離れ、額藏ハ霎時もぬ堪忍地より息絶しぬが獄卒ホハ苛責を駆く。
倒下推立つて水を吐いて死ぬ。且して甦生せり。それよりて兩三日町進ハ術とかえて
あもく苛責を重くされども額藏ハ初のどく主の仇人を敷ひてのみ苦痛を
忍び遂に處せら。悉く氣絶されども獄舎よりれが恙か。故あらず。額藏ハ
猶夜犬山道節が肩の瘤を辟てて忠の字の玉の時毫も才ともかば。
さだも玉の換物とせず。或とて頭髪の中より籠を拂ふ時耳より隠し又
口中より含てす。うる程より杖撲れ或水を沃せ種々の苛責。筋骨痛く心地死ぬ覚る
。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。
おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。
おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。

やん渠ハ莊官の小廝よりけり。殿の人を殺せり。もとの故あらず。かく。筋術を
めぐらん。かく。隨より責ひさて脱去してあらゆるを殺すまで。かく。月裏尋思
し。遂に使者を鎌倉へ遣て主の大石兵衛尉より謝獄の趣を証する。背介が首伏云
。まつゆま。ひき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。
かく。圓塚山少入を殺せり。額藏と信乃が所為か。云々の後より頑れるふ
あり。額藏も既に陳述よ辭り。莊官墓六夫婦を害して身の罪を脱する。ふ
還く宮六五倍ニ主の讐言かりと証ちこと曲より首伏せり。され背介ハ曩裏日より獄
や舍のく身あり。信乃ハ許我へ走りとぞのやえられわらど鄰國敵地よりれべ。
車を追捕の儀よ及び。但額藏ハ苛責を肩とせば幻術邪法を修むる。次打々
事。おとまゆらき。遠子誅戮せら。非常の事もある。歟と忠義を誣く奸邪と資け。
怪れ。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。
おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。
おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。
おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。おとまゆらき。

六既よ五逆の罪人へ當よ竹鎗の刑罰よ行ひ。かくは殿上社平が復讐の義を
協ねどもそゝも兄の讐かれバ法場ト臨て獄卒立代り額藏よ鎗を鍋と頸々
とハ隨意ゆべ一額藏う梟頭加ゆる邪術わくバ是凡庸の罪人かば。をく
非常を敵りよと下知せられうれバ町進水ハ欣然とて駆て社平五倍ニ主余を復
つ。明日未の比及す庚申塚のほどうゆく刑戮を終ん宜準備あべーと懇意をとだ
考。とたごぞ下みえきぞ。とまんつま。とまもとま。とまもとま。とまもとま。
示はこの時五倍二が眉間の瘍を過半愈へ。と兩人雀躍して主因を拜謝。町進水
計議と徳とて且歎び且勇む意氣揚々と含笑く免許の復讐言をばども。
彼奴が腋肚刺串ハ毛怒を雪ゆ足れり誅戮の義を任され。武運と稱ゆと言
ふ。と。あうで。ああえう。ざんぐ。おふう。と。おふう。と。おふう。と。おふう。
兼して退せし。嗚呼奸黨の殘毒を且天よ捷の歎異竟額藏が
せひめいづよ。と。おふう。と。おふう。と。おふう。と。おふう。と。おふう。と。おふう。と。おふう。

里見八犬傳第五輯卷之二終

